

## あの日から2000日を迎えて



役場本庁舎屋上より  
(平成28年7月撮影)

### 浪江町長 馬場 有



私のデスク横のカレンダーの日付には、避難を開始した平成23年3月11日から何日目になるか、その数字が書き込まれていました。それが8月30日で2000日になりました。

そしてその2日後、避難生活2002日目となる9月1日から、いよいよ「特例宿泊」が開始しています。インフラ復旧に目処がつき、特例という形ではありますが、町民の皆さまを町にお迎えする準備が整ったこととなります。

このカレンダーの数字はいつまでカウントを続けるのか、と聞かれたら、その答えは「帰還困難区域の避難指示がすべて解除されるまで」です。223平方キロ、浪江町全土の避難指示が解除にならないければ、いわゆる「帰町宣言」はできないからです。

つまり、浪江の帰町宣言とは、「町全土で帰還したい人が帰還できるような状態になりました」という意味です。マスコミによく、「いつ宣言するのか」と聞かれますが、中には帰町宣言というニュアンスで質問している向きもあるようです。しかし私は、復興したかどうかは、後世の方が評価することだと考えています。残念ながら、浪江町は完全に元どおりには戻りません。けれども、今できることは、元の状態に少しでも近づける努力をすること。その努力を一歩ずつ、地道に積み重ねた先にか、どんな形の「復興」もあり得ないので



「希望とは、  
もともとあるものとも言えぬし  
ないものとも言えぬ。  
それは地上の道のようなものである。  
地上にはもともと道はない。  
歩く人が多くなれば、  
それが道となるのだ。」  
(鲁迅「故郷」より)

最近、鲁迅の「故郷」を読み直しました。その中にこの一節があります。道は最初からあったものではない。人が通り、踏み固められてできていくものだという事です。  
避難指示が解除されたら先陣を切って帰り、町を再興させていくんだ、という方々。私を知っている限りでもたくさんおられます。来春に想定される避難指示解除

までには、先般の住民懇談会での議論も踏まえて整理すべき事柄が、まだ多く残されています。しかし、いつ解除になっても、そうしたパイオニアとなる皆さんが結集することで地が踏み固められ、新たな道ができていくのだと、あらためて感じました。

震災前から町は「町民協働のまちづくり」を理念に掲げてきました。が、これから始まる復興まちづくりのプロセスこそ、役場職員だけではとうてい成し遂げられない。まさに本町の協働参画が求められていると言えます。

町民の皆さんの助けが必要なことはたくさんあります。たとえば除草や町内パトロール、高齢の方の見守りなど、今月からの特例宿泊でも課題が出てくると思います。そうした細かいことを地道にひとつずつ、皆さんの力を借りながら解決していくことが必要です。

先月から、復興計画【第二次】の策定も始まりました。平成24年秋に策定した【第一次】から4年がたち、見直しが必要になったところを中心に策定委員会の皆さんで議論していただきます。そして、住民懇談会でのご意見等も勘案したうえで、町へ提言していただくことになっていきます。

しかし、復興計画【第一次】に掲げた町の将来像、「復興を実現し飛躍するふるさとの姿」の4つのイメージは、大きく変わることはないでしょう。

- \* 震災と原発事故を乗り越えた安全・安心な都市なみえ
- \* 既存産業と新たな産業とが地域経済を支える浜通り中部の中核都市なみえ
- \* 将来につながる高度な教育となみえの豊かな心を次世代に伝えていく教育都市なみえ
- \* 復興を成し遂げた象徴として世界に誇れる国際的な災害研究都市なみえ

【第一次】策定以降、私たちは、これらのイメージを具体化する方向へと、少しずつではありますが前進しています。

そして、こうした町の活動すべてを支えるのが電力エネルギーです。原発事故を経験した自治体として、原子力に頼らない町を標榜するのは当然でしょう。しかし、私たちのキーワードはむしろ、「エネルギーの地産地消」だと考えます。風力、太陽光、水素など、さまざまな発電手法を駆使しながら、自分たちで使う電力は自分たちで賄うという発想の社会を目指すべきではないでしょうか。

今回の特例宿泊をご利用になる方も、そうでない方も、同じ浪江への想いを胸に抱きつつ心安らかなお彼岸を迎えられますよう、また残暑厳しいなか何とぞご自愛賜りますよう、祈念いたします。